

大原社会問題研究所五十年史

I 創立前史

大原孫三郎氏と愛染園

大原社会問題研究所は一九一九(大正八)年二月九日、大阪において創立された。その誕生にいたるまでには、すぐれた先覚者の並なみならぬ努力が払われ、また長い準備期間が経過している。研究所創立の、いわば前史ともいべきこの間の経緯を明らかにするためには、まず研究所の設立者たる大原孫三郎氏について知っておかねばならぬ。

大原孫三郎氏は岡山県倉敷の素封家に生れ、先代より引きついだ倉敷紡績株式会社の経営に成功して財を成したが、一九〇〇(明治三三)年石井十次氏*と相識るに及んで孤児や貧民の救済事業に関心を寄せるようになった。石井氏は宮崎県の人で熱烈なキリスト教徒であったが、岡山の医学校に在学中たまたま街頭の一孤児をあわれんで下宿に引取り養って以来、次第に孤児の救済に献身するようになり、遂に世界的に有名な岡山孤児院をつくりあげた。一九〇七(明治四〇)年大阪と東京にその事務所を設けてからは、愛染橋保育所、夜学校、同情館等をつぎつぎに開設して、孤児養育の外、貧民療養、教育、職業紹介、免囚保護、売笑婦救済など、多面的な救済事業を行った。大原氏は石井十次氏の強い影響をうけてキリスト教徒となり、孤児院の後援者となった。大原氏はまた早くより民衆の啓蒙教育に意を注ぎ、一九〇二(明治三五)年より徳富蘇峰、谷本富氏らをまねいて倉敷日曜講演を催した。大原氏はまたロバート・オーエンに傾倒して理想的な産業社会を夢みたといわれる**。

*石井十次氏については、柴田善守『石井十次の生涯と思想』(春秋社、一九六四年刊)を参照。

**大原氏は後年、自己の経営する倉紡の婦人労働者を対象とする深夜業調査を、大原社会問題研究所員暉峻義等氏らに委託し、結局そこに倉敷労働科学研究所を設立した。この外、奨農会(のちの大原農業研究所)、倉敷美術館、倉敷天文台等の設立を発意し、それらの維持に巨額の私財を投じた。

一九一四(大正三)年石井十次氏が業半ばにして永眠するや、大原氏はその志をつぎ、自ら基金を投じて岡山孤児院大阪事務所を拡張し、天王寺の貧民窟の近くに財団法人石井記念愛染園を設立し、隣保事業を開始した*(一九一七年一月二九日)。この愛染園の理事には、大原氏のほか、小河滋次郎、上野理一、本山彦一、石神亨の諸氏が就任し、また前岡山孤児院大阪事務所主任富田象吉氏が主事となった。

*鷹津繁義編『石井記念愛染園三十五年史』(社団法人石井記念愛染園、一九五三年刊)参照。

愛染園はさしあたり岡山孤児院より引きついだ愛染橋夜学校と保育所の経営に当たったが、当時わが国社会事業界の最長老たる地位にあった小河滋次郎博士のすすめにより、大原氏は園内に救済事業研究室を設けた。これは、それまでわが国で行われて来たような、慈善事業、救済事業によって社会の病弊たる貧民や孤児を救済したのではもはや不十分である、さらに深く救済事業のあり方と、救済を必要とする社会の状態を研究することも重要である、との認識にもとづくものであった。

一九一八(大正七)年一月三〇日、大阪市天王寺に愛染園の新築工事が落成した。その開所式

の席上、大原氏は大要つぎのような発言をして人びとの注目をひいた。

この度愛染園に附設した救済事業研究室は極めて小規模ではあるが救済事業と社会状態の調査研究に当り、さらに社会事業を推進する活動家の育成にも努めたいので、近い将来、独立の研究機関に発展せしめたいと思う。

この救済事業研究室には、小河博士の推薦で当時内務省救済課の嘱託をしていた高田慎吾氏が迎え入れられた。高田氏はアメリカにおいて児童保護、社会事業を研究して帰朝された人である。そして高田氏の就任後間もなく、救済事業研究室は救済事業研究所(社会事業研究所)に発展するのであるが、それは、いずれ後に記すことにする。

法政大学大原社会問題研究所五十年史

発行 1970年11月

編・発行法政大学大原社会問題研究所

[前のページ](#) ← [法政大学大原社会問題研究所五十年史【目次】](#) → [次のページ](#)

[研究活動・刊行物](#) [OISR.ORG全文検索](#)

[法政大学大原社会問題研究所\(http://oisr.org\)](http://oisr.org)
